

第十八回庭野平和賞贈呈式 あいさつ

本日ここに、イスラエル在住の宗教指導者であり、また、教育者であるエリス・チャコール師をお招きし、「第十八回庭野平和賞」の贈呈ができますことを光栄に存じます。

チャコール師はユダヤ人とパレスチナ人の融和を目指し、聖職者として、また、教育者として長年にわたり国内外で活躍されています。特に、一九八二年には現在のマー・エリアス学園を創設、同学園は宗教や民族の相違を超えた青少年のための相互理解の場として発展し、これまでに平和のための人材を数多く輩出しています。

チャコール師自身、民族の悲劇により避難民となって迫害を受けた人でもあります。しかし、暴力に対して暴力で報復するのではなく、怨念と憎悪の悪循環を絶つための行動に立ち上りました。私たちはそこに、チャコール師の信仰に基づく愛を見るのです。

「法句經」の一節に『怨みは怨みなきによってのみ、消ゆるものです。怨みにむくゆるに怨みをもってすれば、その怨みはいつまでも続き、消ゆることはありません』と説かれています。迫害や暴力を受けた体験は、怨みの感情をあとからあとから湧きたたせ、報復の思いを子孫にまで残し、人々の心を蝕みつけます。この悪循環を断つのは怨みを解消すること、ただそれ一つ、あるのみです。

私たちは同じ一つの永遠なるいのちを生きる同胞です。宇宙の万物を貫く一つの真理によって生かされている家族です。仏教ではこの真理を「妙法」と言い、人間同士はもちろんのこと、生きとし生けるものすべてがこの妙法によって生かされている兄弟姉妹であると教えています。

すべてのものは同じ一つの永遠なるいのちを生きている・・この、いのちの根源を互いに見つめるとき、人々ははじめて怨念と憎悪の呪縛から解き放され、手を携えあうことができるのです。チャコール師は「ユダヤ人とパレスチナ人は血を分けた兄弟である。われわれは決してそれを忘れてはならない」と述べておられますが、まさにその言葉どおりであると思います。

「私たちの宗教は正しい」という信念は、どの宗教・宗派に属する人々にも共通したものです。それは布教の原動力を生み出しますが、同時に排他性を帯び、分離への強大な力ともなる危険を帶びています。極端に排他的な原理主義や教条主義の信仰はやがて暴力や民族主義と結びつき、結果として、平和とはかけ離れた悲劇を歴史に残す元凶ともなっています。

教理的な正当性とはその宗教に独自性があるということであって、一宗派のみの正当性や正義を絶対化するものではなく、また、宗教の本義から見れば部

分的なことに過ぎません。神仏の願いは本来、人々の平和と幸福にあり、それはすべての宗教に共通しています。ですから、排他性は人間の狭小な価値観に偏ったものであるばかりか、宗教者にとって神仏の意思にも逆行する自己矛盾でしかありません。

真に自己の正当性を知る者とは、他の正当性をも認める者と言えます。そこから理解が生まれ、寛容と信頼が育まれます。すべての宗教は平和のために手をつなぎ、献身し合うことによってのみ、その存在の意味を持つことができるのです。

本来人間は、みんなと仲良く生きたいという共通の願いを持っています。共に生きるいのちだから、互いに尊びあって生きたいという衷心の願いを持っています。怨念と憎悪の歴史を乗り越える潜在的な力を持っています。それをいつでも・どこでも・だれでも見失わぬために宗教があり、そして、心の底に根付かせるために教育があります。

イスラエルとパレスチナをめぐる状況は依然として楽観を許さず、問題の解決は容易ではありません。ややもすると絶望だけが現実に重くのしかかってきます。だからこそ、人々を本来の願いに目覚めさせ、希望につなぐ実践が大事です。チャコール師は、「心に根ざす平和をこそ目指さねばならない」と言われ、教育を通じ平和の人を一人づつ育んでいます。それは地道な活動ではありますが、まさに、人の心深くに平和の種を植える確実な歩みでもあります。

私もこれまでに何回かイスラエルとヨルダンを訪問し、人々の悲しみの深さに触れては自身の非力を思いました。しかし、こうした困難な状況下でも希望を捨てず、チャコール師と同様、青少年の教育を通して民族の融和と和解に努める人々がおられ、その熱い志と献身的な奉仕に触れ、大きな感銘を受けました。

どうか、これからもチャコール師とマー・エリアス学園のみなさま方の愛と慈悲によって、希望と光明が未来へ向けて大きく展開されますよう願ってやみません。そして、遠く離れた日本から微力ながらも声援を送り続けたいと思います。

本日は「第十八回庭野平和賞」を、エリアス・チャコール師に贈呈できますことを神仏に感謝申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。

ありがとうございました。

二〇〇一年五月一〇日

庭野平和財団 総裁 庭野日鑛